

本当の教育者はと問われて

文学部 日本語日本文学科
教授 安田 孝

はるかな昔、私は高校の国語の教員になるつもりで大学に進学した。中学三年のときに受けた川本信幹（のぶよしというのだが、ひとからはシンカンさんと呼ばれたという）先生の授業につよく惹かれ、川本先生のような先生になりたいと考えたからである。川本先生の授業のどういうところに惹きつけられたのであろうか。

国語の時間にはクラス全体に活気が感じられた。教師にとっては、質問にすぐ答える生徒を指名すればノーリツ的(?)に授業を進めることができようが、川本先生はそうしなかった。国語は得意科目だった私が手を挙げて、「安田は待っている、ほかにいないか」といい、何人かの生徒が答えた後で、私に答えさせた（そのことに私は不満を抱かなかった）。中学が発行していた冊子に掲載された川本先生の文章に、「わからない」とは言わせないという一節があり、記憶に残った。答えられないような、難しい質問をしたわけではないから、「わからない」という答えは答えにならないというのである。「わからない」と答えてすまそうと思っている生徒が多かったのであろうか。『新編 魅力ある国語の授業を創る』（東京書籍 2010年11月）の「第一部 魅力ある授業を創る」「第十六章 教務手帳の効果的な使い方」で先生は次のように書いている（「都心に近い中学校」というのが私の学んだ中学である）。

その頃(注:前節に「教壇経験九年目」とある)、東京の都心に近い中学校であったが、私が赴任した時、最初に勤めた山の手の中学校に比べると、どの時間も生徒が死んだように静かであった。これではならじと、教室を活性化させるために様々な工夫をした(…)

多くの生徒に発言させるようにしたのも、そうした工夫の一つである。「第四章 指名の仕方・発言のさせ方」には、「私の普段の授業のペースでは一時間に平均十四人(男女各七人)指名する。」と書いている。また、「指名してすぐに答えなくてもしばらく待つ。答えが出なければ、補助的な質問をして考えやすくする」とも書いている。こうした授業に惹きつけられたのは、私ばかりでない。第四章の結びには高校「一年男子」の「一学期の国語学習で自覚したこと」という文が掲載されている。中学では「国語という教科は、僕のもっとも嫌いな教科であった」が、高校で川本先生に習って国語が好きになったという。「自分自身の自覚したこと」について、次のように書いている。

発言するということが重要であるということ。発言することによって、授業に足を踏み入れたことになる。自発的に発言するなら、意欲的になったことの現れであるから、なおさらよいと思う。

大学で教職に必要な科目を履修し教育実習もし、東京都と川崎市の教員採用試験を受けどちらも合格した。ふとしたことから大学院に進学し、結局、大学の教員になった。私が授業を担当するようになったとき、参考にしたのは川本先生の『魅力ある国語教室を創る』（明治書院 1990年10月）であった。ここまで述べてきたことからいうと、演習の際、報告者以外の受講生に何か発言するよう促してきた。「第十四章 指導者の話術」も参考にした。大学の教員も、授業の時、学生にわかるような話し方をするよう気を付ける必要があるのである。

川本先生にかなわないところもある。「第十七章 国語教師の資質と自己研修のあり方」で、次のように書いている。

私は幸いにして教壇に立ってからも読書意欲は衰えず、今日でも、新聞は一日に三紙、週刊誌は一週に四誌、一般書・専門書を一月に三冊程度読む。

「忙しいから本が読めないという方が多い。(…) 要は寸暇を惜しんで読書しようという意欲があるかどうかである」という指摘は、私のような日本文学の研究者には耳の痛い話である。

〔付記〕川本信幹先生は2011年11月に亡くなられた。

ハワイ、ホノルルの学習環境

文学部 英語英米文学科
准教授 奥村 栄子

英米学科では、2回生の前期、後期に分けて、ハワイ大学マノア校アウトリーチ・カレッジで半期ずつの英語研修を希望者に行っている。今回、平成23年度第10期ハワイ大学セメスタープログラムの2回にわたる引率を終え、研修校のハワイ大学マノア校がある、オアフ島ホノルル、での英語研修が、日本人英語学習者にとっては特に、アメリカ本土やイギリス等での研修と比べ、いかに、より適した語学学習環境を提供しているか、英語研修の場としては最適ではないか、と実感したのでそれについて述べてみる。

一言でいうと、英語での対面コミュニケーションを行わねばならない「本番」になると、あがって緊張してしまい、その実力を発揮しにくい、と言われる緊張症の日本人学習者が、リラックスして緊張せずに、英語を使用し（話し）、学習出来るのが、ハワイ、ホノルルではないか、という事である。

「緊張緩和」（この情緒面での「緊張緩和」は、英語教育では「アフェクティブ・フィルターを下げる」と、一般に表現されているものである。）はどの様な形であれ、学習時には、緊張せずのびのびとした環境の方が学習がより促進され、学習効果が上がる事は疑いが無い。しかし、どうしても緊張してしまうのが、英語学習、特に英語を話す場面である。ほとんどの日本人英語学習者、特に、中学生から大学生の若い学習者にとっては、英語ができる、と言う事と「英語を話せる」と言う事は同義である事が多い。これは、ハワイ研修の動機を学生に質問すると、英語を少しでも話せる様になる事というのがほとんどの学生の解答である事や、英米学科志望の第一の動機も、英語を話せる様になりたい、が9割を占める事からも明らかである。そしてこの「英語を話す」際には、練習時でさえ、緊張する。まして、いわゆる外国人と、あるいは英語のネイティブ・スピーカーとの対面コミュニケーションの場合、この緊張の度合いは最高になる、と言ってよいであろう。普段の日常生活に於いて、英語を話す必要がほとんどないのであるから、いざ、と言う場合に緊張してしまうのは仕方が無い事ではある。よく例えられる様に、運転免許は持っている（英語学習はしている）が、実際に運転した事があまり無い（学習した事を実際に応用する場がほとんど無いに等しい）、ペーパードライバーの様なものである。つまり、教室では、模擬コミュニケーションの練習は出来ても、実際にそのスキルが試される「本番」を体験できる場が大変少ない、「場数を踏んでいない」ので慣れていない、というのが、極度に緊張してしまう主な理由である。

しかし、ハワイのホノルルという環境は、英語母国語話者を相手の対面コミュニケーションをしなければならない、という日本人が苦手とする環境にもかかわらず、日本人が英語を話す際に感じる、この避けられない緊張を緩和する要素が多く、緊張症の日本人をリラックスさせてくれる要素が多い、という事に気がついた。以下、英語学習時の、特に英語を話す際の緊張を、いかにホノルルでの学習環境が緩和し、その結果、学习上最も重要だと言われている、リラックスした、のびのびとした良い学習環境を提供するか、という好条件を挙げて行く。

ハワイと言うと南国の楽園、リゾート観光地、というイメージが圧倒的で、研修に集中するよりは、ショッピングや観光等を楽しむ事が勝ってしまうのではないかと考える人も多いだろう。事実、「ハワイでの研修というと、遊びに行ったと思われがちなので行かない。」と述べた学生もいた。しかし、

正に、これが第一の理由である。まず何よりも、楽しみが一杯ある中で、学習出来る、という点である。若い学生にとって、観光にショッピングに、と毎日を楽しみながら、わくわくする様な環境で英語を学習出来る。楽しく感じていると学習した事も定着しやすい。クラスでの学習後は、学習した英語をすぐに教室の外で応用する。つまり、その楽しいショッピングや観光の際に、実際のコミュニケーションの為に英語を使う、機会がある。学習動機もあがる訳である。

2番目は、多種多様なエスニックが融合しており、人口が集中するホノルル市街で見られる、中でもアジア系人口の多さである。英語母国語話者=白人系、という呪縛、「白人緊張症」を逃れて、親しみが湧く。(この様な、英語と言えばアメリカ英語やイギリス英語、白人系、といった「人種/言語差別的な」連想をするのは、筆者の様な古い世代だけであろうか?) これだけでも気楽になる。では、ハワイでなくとも他のアジア圏であれば、英語研修の場としてはよい、と言う事になるのか。英語使用の面からは大いに結構であるが、ハワイは、英語が第一言語で、英語母国語話者の州でもある。非母国語話者である日本人にとっては、応用のきく確かな英語の基礎も学習出来る。

3番目は、日本人観光客の多さもあって、そんな観光客相手にちょっとした日本語や営業用日本語を話せる人口の多さである。日系人の人口も多いが、仕事で、あるいは住民として居住している日本人も多い。というと、では日本語で話してしまうのではないか、と思われがちだが、英語母国語話者がほとんどであるし、英語圏の環境の中、会話は当然英語で始められる。英語で会話を始めて、日本語が少し出来るとわかってても、英語母国語話者が相手であるのだから、当然英語で会話を続ける。ただ、何かあると会話の最中に日本語の単語を試す事も出来る。そういう事がわかると、気楽に英語を話せるし、少々英語が通じない場合でも、思い切って色々な英語表現を試せる。更には、比較文化的な視点から、会話もおおいに弾む。

4番目は、Englisihesと言われる、英語の多様性である。ハワイ、ホノルルは、多数の人々を引き寄せる。英語研修中の、様々な文化圏出身の人々、中には学生のクラスメートをはじめ、多種多様な文化圏出身者、観光客、等、その中には英語母国語話者でない人も多く、それぞれの母国語の影響を受けたなまりや英語表現で英語を話す。こちらもジャパニーズイングリッシュでも臆せず英語を話してみようという気になる。お互いが英語を外国語として使用している時には、なまりや母国語の影響が強すぎると、相互理解に支障をきたす事もわかり、また日本人同様に英語を外国語として学習し、ほとんどバイリンガルの域に達している人達やクラスメートに接する事も多いと、自分ももっと上手になりたい、わかり易い明確な英語を身につけたい、と思うだろう。学生達も、インターチェンジと呼ばれる英語コミュニケーションの実践の場で、ハワイ大学の選ばれた学生達と英語で話をする時間や、ランゲージ・エクスチェンジというタイトルの、様々な国出身の学生達と、英語に限らず、何語でもコミュニケーションを取る時間が、一番楽しかった、と言っていた。この様な体験から、英語という言葉が、民族、文化を超えて今や、意思伝達の為の「地球語」となりつつある事を実感できるし、英語学習の大切さを痛感し、今後とも英語学習を継続して行こうと言う強い動機を形成していく事になる。日本からは、ハワイはアメリカ本土よりも近いし、気楽に行ける。英語学習も兼ねて、何度も、繰り返し行きやすい所でもある。

最初に述べた様に、楽園リゾート観光地のハワイで、わくわくする雰囲気の中で楽しみながら学習できる、というだけでも、高い研修効果が期待できる、よい研修場所である事はわかる。これ以外にも、今迄述べた様な理由で、ハワイ、ホノルル、という土地柄や環境は、特に日本人の学習者には、英語学習にとって、中でも英語でのコミュニケーションの学習と実践の場として、最適ではないだろうか。

教職科目としての「哲学」の重要性

文学部 神戸国際教養学科

教授 狩野 恭

神戸国際教養学科では、中学校社会科の免許状取得に関する科目の中に、選択科目として「哲学入門」が入っている。「哲学入門」を担当している教員として、「教育」「先生」にとっての「哲学」の重要性について、少し述べてみたい。

最初に個人的な感想を述べることをお許しいただけるならば、私は「教師」という言葉をあまり好まない。日本語にある「先生」のほうがよほど教育の本質を表していると思うからである。先生は「みなさんより少し先に生まれ、先に生きてきた人」という意味に理解したい。先に生きてきた一人の人間として、君たちに伝えたいことがある。これが教育の心であると思う。

筆者はかつて教職必修科目としての「道徳教育の研究」という科目を担当していたことがあった。そしてその時、学生諸氏に強調したのは、「道徳」とはそもそも何なのか？このことをまず、教育にあたらせようとする人間は真剣に考える必要がある、ということであった。「道徳」とは何かを自ら考えずに、「道徳」を教えることはできないであろうし、「道徳教育」を実践することはできないであろうと思ったからである。もちろん、この問いには、答えが一つあるというわけではないかもしれない、いろいろな答えがありえよう。しかしそれでいいと思う。

もっと広く言えば、そもそも「教育」とは何をすることなのか、あるいは、何をしないことなのか？という問いを、これから教壇に立つ学生たちに、教壇に立つ前に、少しでも考えていただきたいと思っている。いや仮りに、教壇に立つことがなくても、母親になることはあるかもしれない本学の多くの学生にとって、「教育」の本質について、教員や親になる前の今、考えておくことは決して無駄ではないという思いが私の中には常にある。自分自身を振り返っても、小学校から高校、大学まで、いろいろな先生に出会ってきた。それらの先生の当時のひととなり、今でも部分的にはあるが鮮明に私の記憶に残っている。しかし、今振り返ってみると、私の心に残っているのは、折々に触れたその先生の〈ひととなり〉であって、教科の中身はわずかしかない。

教育の〈技術〉を学ぶことはもちろん重要なことである。それぞれの教科の内容を学ぶことも、もちろん必要なことであろう。ただ、書を読む心や楽しさであったり、数学的なものの考え方であったり、教科の内容であっても、できるだけ、その本質を伝えることを心がけてほしいと思う。

教育は〈人間〉と〈人間〉との関わりでありふれあいであろう。そこには、こども達より先に少したくさん生きてきたという以外に本質的な違いはない。そして、クラスのなかには、誰一人として同じ人間はない。それぞれの人間をとりまく環境も日々変化している。その意味では、いつも教育は〈初舞台〉であろう。何を〈教〉え、何を〈育〉むのか？そう考えると、自ずと、教育をする立場になろうとする自分自身に意識が向くはずである。その意味で、教育は自分自身を人生の後輩に晒すことであるともいえる。そのためには、自らを今のうちに、そして、これからも続けて、あらゆる意味で鍛えねばならない。「教育」の本質を考え、それを実践する自分自身を考える。「哲学」の重要性は、ここにある。

学生諸氏には、今、教育に携わる前に、そして、具体的に教育の現場に立ってからも、〈教育とは何なのか〉、〈教育にとって何が最も大切なのか〉を常に考え続けていただきたいと思う。「哲学入門」がそのきっかけになれば幸いである。

「社会」「地歴」の教職をめざす皆さんへ

文学部 史学科
教授 中尾 友 則

今、教員免許制度のあり方が大きな転換点に立っている。

史学科では、中学校教諭一種免許（社会）と高等学校教諭一種免許（地理歴史）を取得することができる。そのためには、卒業要件単位とは別に「教科に関する科目」「教科又は教職に関する科目」「教職に関する科目」の定められた単位を修得し、さらに介護実習・教育実習を受けなければならない。

このように、現状でも免許取得にはかなりの努力が必要であるが、今後、より一層条件が厳しくなるかもしれない。国の中央教育審議会を中心に「今後の教員養成・免許制度の在り方」が議論され、「6年制（修士）」「4年プラスアルファ」など、取得のためのハードルを多角することが検討されているのである。それに対しては、いろいろな疑問も出されている。「6年間も大学に行って教員になろうとする人がそんなにたくさんいるだろうか?」「6年大学に行くことで、それほど教員としての質の向上が期待できるのだろうか?」等々。しかし、実施される可能性は決して低いとは言えないようである。

では、今、教職をめざす学生は不利なのだろうか。いや、むしろ逆だろう。たとえ新制度が実施されることになっても、それは数年後のことであり、当面直接の影響があるわけではない。その上、現在、団塊世代の教員が大量に退職し、各県の教員採用枠はかなり広がっている。教職希望者にはまたとない（たぶん今後もありえないほどの）チャンスだと言えるだろう。確かに、「社会」「地理歴史」科の教員採用試験をパスするのは容易ではないが、早めに準備をはじめ、しっかり取り組んでいけば十分可能性はあるだろう。希望をもってがんばってほしいものである。

本気で教職を希望する人に、経験から、いくつか要望をしておきたい。

まず、当たり前のことながら、専門についての知識をしっかり身につけてほしい。これがあいまいだと生徒に信用されない。（もちろん採用試験にも通らないだろうが。）とくに、就職したら、小生意気な生徒に験されるのでそのつもりで。（ちなみに、私の中学時代の理科の大先生はあっぱれな人であった。わざと困らせようとしたこちらの質問にこう答えたのである。「そんなことを知ってたら中学校の教員をしとらんよ。わかったらそっと教えてくれ。」それ以来、私はこの先生が好きになった。ただし、この手がいつも通用するとは限らない。）

次に、ゼミなどで、自分の考えていることを興味深く相手に伝える工夫をしてほしい。栄養がある（知識の正確さ）だけでは生徒は飲み込まない。味付け（伝え方）も工夫しないと。

最後に、気の許せる友人と、ユーモアがほしい。これがないとだんだん重くなる。煮詰まって抜け出せなくなる。

では、あえてもう一度言っておこう。今がチャンス、がんばるとき。

面接力向上のために②（面接の基本）

教職支援センター長
岸 本 芳 信

昨年の年報では対話力ということを中心に“面接力”について考えてみた。今回は、その2として“面接の基本”について整理してみたい。

まず、面接全般について一言で述べると、その人の人柄、教育に対する心構え、受験地の教育への思い等を評価しようとするものであり、受験者は日頃から、自らの教育理念を確立し、教育に対する熱意を高める等、自己を磨いておくことが必要である。次に、面接の基本対応を示す。

(1) 受験生らしい清潔感を与えよう。

まず、格好からまとめることである。短時間で評価されるものであり、第一印象を大切にしたい。そのためには、年齢や男女を問わず誰にでも好まれる、服装、入室のマナー、いすの座り方、言葉遣い等をよく訓練し、自分のものにしておくことがまず第一歩である。

(2) 意欲・想いを積極的に伝えよう。

でしゃばりすぎるのは良くないが、初対面の人にも自ら進んで応答できるように訓練しておいてください。そのためには、常に問題意識を持ち、日常の社会的出来事に関心を持ち、自分なりに考える習慣をつけておくことが大切である。応答は完全なものでもなくてもいいが、誠実に自分の蓄積範囲で判断し、明るく元気よく応答しよう。

(3) 自らの良いところをわかってもらおう。

面接すべてが自分の売り込みと考えて良い。特に自己PRの時間はほとんどの受験地で設定されており、自分の一番言いたいことをはじめ、2～3つのことについてあらかじめまとめておこう。具体的に経験・体験をまじえて話すと理解されやすい。

(4) 表現力を豊かにしておこう。

面接官に良い印象を持って聞いてもらうためには、表現力も大切になる。表現力を豊かにし、想いを聞いてもらうためには、社会の出来事に敏感であること、つまり、普段からテレビや新聞のニュース等に気を配り、他の人の表現を良く見聞きするよう習慣付けたいものである。

(5) 聞く耳を育てておこう。

緊張して臨むことは大切であるが、面接官の質問を正確に聞き取るよう、冷静に対応することがスタートである。面接官の質問の内容・意図がわかればしめたものだ。普段から人の話を正確に聞くよう心がけよう。

(6) 受験地の教育状況を理解しておこう。

受験地の教育の状況、方針、地域の状況等、概要を掴んでおこう。特に、インターネットや募集要項で確認し、求めている教員像はきっちりと確認し対応を考えておこう。

次に、面接の種類とそれぞれへの対応について考えてみる。面接の種類については各府県によって少しずつ異なるが、一般的には集団面接と個人面接に分けることができる。また、同じ人物評価の対象と

して、集団討論、場面指導、模擬授業、ロールプレイなども実施されている。もちろん、これらの中には、話し方や指導技術等も含まれているが、以下、その概要と対策について整理してみたい。

1 集団面接

(1) 概要

一般的に、3～4人の面接官で実施される（受験地によっては2人の場合もある）。受験者の確認の後、自己PR、面接官の質問に指名または挙手で意見を述べる。内容については、ひとつの質問に対して順に応えるタイプと一人ひとり違った質問に応えるタイプがある。詳細は過去の受験者の報告や受験案内冊子などを参照してください。受験地の面接時間によって違いがあるが、一人の発表時間は1分以内を標準とし、発表回数は3～5回程度の機会があるところが多い。

(2) 対策

かなりの確立で、以前と同じ質問がある。過去の質問例を見て、回答案を考えてみる必要があるでしょう。また、受験地の「求める教員像」「教育の目標や様子」を、受験地及びその教育委員会のホームページ等で調べておくことが大切である。

回答に当たっては、ひとつの質問について、だいたい1分以内で要点を的確に応えることが大切であり、その為に、普段から要点をまとめる訓練、適切な言葉遣いの訓練が必要である。頭の中で考えるだけでなく、文章にして書いてみて、実際に声に出して喋って見る必要があるであろう。

集団面接では、強いていえば、めがねに合わない受験者のふるい落としが主体になろう。したがって、協調性、社会性、明るさ、前向きな姿勢が大切である。コミュニケーション力を身につけて、簡潔明瞭に、結論から述べると良い。他の人を非難したり、結論で「○○だ」という限定的な応答をしたりしないように気をつけよう。

2 個人面接

(1) 概要

面接官の数、内容等は集団面接と同様である。ただし、個人面接の場合は、追加質問や関連質問があることもある。このことを圧迫面接と捕らえる人もあるが、要は、受験者の応答が面接官に十分に伝わっていないことが考えられる。したがって、質問の意図をよく理解し、丁寧にわかりやすく応答したい。

(2) 対策

具体的に個人の特徴・性格、教育に対する思い等が浮かび上がるように応える必要があろう。そして、受験者自体の良いところが面接官にわかってもらえるように、丁寧に要領よく、心をこめて話すことが肝心である。

応答の仕方等については、集団面接と同様に考えてください。特に、個人面接では「採用したい人」と評価してもらえるよう、主語・述語、語尾をはっきりと、質問に対する自らの方向性や使命感などを入れよう。結論から入り、その理由を体験・経験等を交えながら、簡潔かつ具体的に述べるのが肝心である。再質問も想定し、面接官の質問趣旨を良く掴んで丁寧に応答しよう。自らの教育に対する想いを熱く語りたいものである。

また、普段から「自己PR」「教育の今日的な課題や教育関連用語」「受験地の様子や求められて

いる教師像」「児童生徒・保護者・地域・教師間等との信頼関係と協力関係」「教師としての力量と自ら目指す教育論」等の事項について考えをまとめておくことも必要である。

3 集団討論

(1) 概要

まず「討論テーマ」が与えられる。テーマを与えられた後すぐに討論を始める場合と、多少考える時間を与えられる場合がある。受験者の中から司会を立てる場合と面接官が進行する場合がある。グループの中における活動や討論の過程において教師としての個人の資質を評価される。教師になるための「意欲・関心・態度」「協調性」「討論への貢献度」等が求められている。他者の考えを尊重し、その中で自分の考えをきっちりと述べられるかが重要である。テーマの如何にかかわらず教育に関連させて討論を進めたいものである。

(2) 対策

評価の観点を理解し討論に臨むことがまず必要である。討論では気負わずに、他人の意見は尊重しみんなで解決に臨もうという姿勢が必要である。そのためには、自分中心ではなく他人の応答を聞く姿勢や他人を非難しないことが大切です。他の人の意見を容認しつつ自らの意見や他人と違うところを述べ、協同して課題解決を図るよう訓練しておくことが必要である。また、集団討論はディベートではないということを心得ておいてください。

4 場面指導・ロールプレイ

(1) 概要

場面を想定し、教師としての保護者・住民・児童生徒との対応を、模擬的に行うものである。はじめから課題を与えられているところ、その場で対応を求められるところがある。受験者が一方的に話すのが場面指導であり、受験者と面接官とが、それぞれ教師役・保護者役等になり話を進めていくのがロールプレイである。

(2) 対策

コミュニケーション力、実践的対応力、柔軟性、危機対応、対応態度等が評価の対象となると想定されるので、普段から、指導困難児童生徒への対応力、苦情処理の仕方等を考えておくことも大事である。そのためには、教育実習や学校ボランティア等で、いろいろな場面を見たり指導状況に注目したりして、「自分だったら」という姿勢で考えておくことが役に立つ。また、相手の立場に立った共感的な対応も常に訓練しておきたいものである。

前述の面接でも必要であるが、実践的指導力については現役生にとっては不十分なところが多いものである。教育実習や学校ボランティアに行ったときに、受身の対応ではなく常に課題意識を持って対応し、先輩教師の行動や対応等に注目しておくことが実践力を高めるのに役立つことになる。

5 模擬授業

(1) 概要

面接官の前で実際の教室を想定して授業の一部を行うのが模擬授業である。時間は5～10分程度のところが多いようであるが、前もって学習指導案を準備し授業を行うところ、当日学習指導案を作成し授業を行うところ、学習指導案なしで授業を行うところ、また、他の受験者や面接官の参

加するところ、途中で面接官がやんちゃな子どもになるところ…と受験地によって様々な型でおこなわれている。

(2) 対策

大学での多くの講義で模擬授業が取り入れられている。積極的に授業者として人の前で経験をつむことで、慣れてくることでしょう。また、学習指導案も多くの人のものを見て、自分でも作成し、ポイントを学習しておきたいものである。教職支援センターにも先輩が教育実習の評価授業で作成したものが保存してあるので、参考にしてください。

最後に、面接での評価について簡単に見ておきたい。多くの項目が考えられるが、いくつか絞って、どのように評価されているのかを見てみたい。なお、最近では受験地によっては評価項目を示しているところもある。是非確認しておいてください。

「態度・服装」：服装がきちりとしている。挨拶がきちりとできる。無作法でない。落ち着きがある。華美であったりだらしなかつたりしない。傲慢な態度でない。…

「協調性」：他人の意見を良く聞いている。集団に参加している。協議・討論を盛り上げようとしている。誠実な対応である。…

「表現力」：用語が適切である。質問に忠実に応えている。意欲的な表現である。社会人としての常識を持っている。論理が通っている。…

「積極性」：熱意・気迫がある。説得力がある。向上心や研究心がある。自ら進んで対応しようとしている。決断力・行動力がある。…

「社会性」：人間的に魅力がある。親和感もてる。周囲と協調できる。人の意見を尊重できる。…

「その他」：教育的資質がある。敬語が使える。学生語でない。丁寧な話し方である。教養が伺える。…

他にも多くの要素がある。肝心なのは、自信を持って普段の自分を話し、教育に対する熱意を語り、教師になったときのやる気を伝えることである。受験希望地の過去の質問例を参考にして、応答の方向性を考えておくと、あわてないで面接に臨める。「一日ひとつ」の気持ちで根気強く取り組んでください。今までの生活経験での夢や感動、将来への夢や仕事への情熱を込めて語ってほしいものである。

“あわてず、あせらず、あきらめず”の気持ちで、しっかりと準備をして本番に臨もう。

(参考図書など)

- 1 教員養成セミナー（時事通信社）
- 2 教職課程（協同出版）
- 3 教員採用試験完全突破シリーズ「面接 99 のポイント」（小学館）
- 4 公務員受験指導ハンドブック（実務教育出版）

乳幼児の保育・教育を巡る専門職と養成

文学部 教育学科
教授 大橋 喜美子

1. 幼稚園教諭免許・保育士資格を望む学生の背景

乳幼児教育・保育をめざす学生の養成を行っている4年制大学、短期大学、専門学校の中には、幼稚園教諭免許と保育士資格を同時に取得しています。また、学生自身も同時に取得保有することを望む傾向にあり、本学教育学科の学生にも同様の傾向が見られます。

そうした希望を持つ学生の背景には、資格社会への志向性について、2つのカテゴリーが存在するように思われます。ひとつには、乳幼児教育・保育の仕事に就きたいからと考えている学生、次に自分は女性だし将来母親になるために免許・資格は何かの役に立つのではないかと、取りあえず同時に取得しておきたいと考える学生などです。

前者の場合は、その背景として国の施策との関係があげられます。近年の乳幼児教育・保育に関する国の動きでは、幼稚園と保育園を統合させて一体化させてこうとする子ども園への移行があげられます。従って求人採用条件に、教員免許と保育士国家資格が同時に必要である傾向が増しています。こうした実情が学生の望む免許資格同時取得へ反映されているのではないかと考えられます。

2. 保育所（園）の幼稚園化と幼稚園の保育所（園）化の背景

幼稚園や保育所（園）に入園する子どもは幼稚園が2歳児の保育をするようになり、保育所（園）化してきました。また、保育所（園）は子ども園や総合施設の設立など、幼保一体化が進む中で、保育の内容においても養護と教育の一体化が望まれ、幼稚園化してきています。

地域での子育て環境の弱体化により保護者や保育者の子育て力の育成が幼稚園や保育所（園）に求められるようになってきたのです。

そこで、幼稚園は教育、保育所（園）は福祉といった二元化の考え方は払拭して、未来を担う子どもを「ヒトとしてヒトらしい感性が育つ」ために子どもの育ちを支えていける幼稚園教諭・保育士の養成が求められていると考えられます

3. 幼保一体化¹を巡る免許・資格

1947（昭和22）年、保育所は名称こそ児童福祉法の中に位置づけられましたが、実際には託児所としての機能や社会的な意識も託児からは抜けきれず、1980年代にあっても国の家庭対策として「母親は家庭に帰り老親の扶養と子どもの世話をすると提唱されていました。

1980年代後半に入ると少子高齢化社会を迎えて、ひとり親家庭の増加、地域環境の変化と共に子どもの問題が浮上、特に1989（平成元）年の合計特殊出生率では「1.57ショック」として社会的にも波紋を呼びました。

女性の目覚ましい社会進出が始まった1990年代には、共働き家庭や待機児童の数が増加し、保育所

の需要が増してきました。そのため、1994（平成6）年になって国は子育て支援に関する10カ年計画として、文部・厚生・労働・建設の4省合議のもとに「今後の子育て支援施策の基本方向について（エンゼルプラン）」を策定しました。同年、大蔵・自治・厚生の大蔵大臣合議のもと「緊急保育対策等5カ年事業」によって、当面の保育施策に対する基本的な考え方を打ち出したのです。2000（平成12）年には「新エンゼルプラン」、2001（平成13）年「待機児ゼロ作戦」、2004（平成16）年「子ども子育て応援プラン」、2008（平成20）年「新待機児ゼロ作戦」、2010（平成22）年「子ども・子育てビジョン」が少子化対策として計画されました。この間、2007（平成19）年には、「ワーク・ライフバランス」が示されました。このプランは、新待機児ゼロ作戦に基づく調査を行い「潜在的保育ニーズ量」を求め、就職希望に応じた潜在的需要を踏まえ、保育サービスや放課後児童クラブなどの量的拡充を図るためⁱⁱとされています。

さらに、2003（平成15）年には、保育士資格は任用資格から国家資格となり、国として子どもの育ちに責任をもち、保育所（園）の責務は重くなりました。

2010（平成22）年6月には「子ども・子育て新システムの基本制度案要綱」が閣議決定されました。2011（平成23）年7月には、政府の「子ども・子育て新システム検討会議」のワーキングチーム（WT）による中間報告が出されたのです。そこでは、2013（平成25）年を目途に一部の保育所（園）や幼稚園の機能を残しつつ、保育所（園）や幼稚園を「こども園」に統一していくことが報告され、4種類の施設や制度が併存すると発表されました。

ここでは、先に述べたように、幼稚園教諭と保育士資格の両方の免許が求められるようになり、すでに数年の歳月が流れています。

4. 幼稚園教員免許と保育所（園）資格の現状と教育学科学生の進路

2008（平成20）年の幼稚園教育要領改訂、保育所保育指針改定には幼稚園や保育所（園）は小学校との連続性についての記述があります。それまでに、すでに試行的に実施している学区やすでにカリキュラムの一部に取り入れている幼稚園や保育所（園）も少なくありません。

ここでは、文部科学省から出されている幼稚園教員免許を中心とした現状などについて報告・紹介します。

（1）幼稚園教員の採用選考の状況（平成21年度実績）

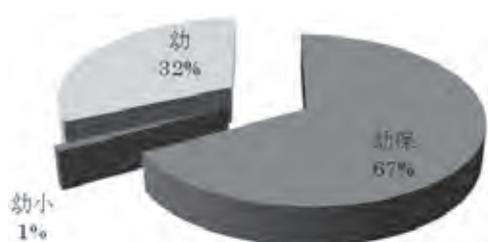


図1. 幼稚園教員の採用選考の状況
（地方公共団体）

幼稚園教員採用選考を実施した地方公共団体（319団体）のうち、幼稚園教諭免許と保育士資格を併有していることを受験資格とした団体は67%（213団体）、幼稚園教諭免許と小学校教諭免許を併有していることを受験資格とした団体は1%（4団体）でした（%四捨五入）、幼稚園教員免許取得者のみの採用は32%でした。（図1：文科省報告を基に作成）

(2) 幼稚園と保育所・小学校との人事交流等の状況（平成 22 年度実績）

平成 22 年度当初、県費負担小学校教員と市町村負担幼稚園教員の人事交流を行った団体は 1.6%（28 団体）、市町村内の幼稚園教員と保育所保育士の人事交流を行った団体は 18.3%（323 団体）でした。

(3) 幼稚園教諭免許と保育士資格の併有状況（表 1）

幼稚園の園長・教頭・教諭のうち幼稚園教諭免許と保育士資格を併有している者の割合は、全体で 74.1%となっています（公私別では、公立：71.9%、私立：74.8%）。

表 1. 幼稚園教諭・保育士免許保有者数¹（出典：文部科学省 平成 22 年 5 月 1 日現在）

● 幼稚園の園長・教頭・教諭のうち幼稚園教諭免許と保育士資格を併有している者の割合は、全体で 74.1%であった。（公私別では、公立：71.9%、私立：74.8%）

幼稚園教諭（園長・教頭・教諭）に係る幼稚園教諭免許と保育士資格の併有率

		公立		私立		計	
		H22	(H20)	H22	(H20)	H22	(H20)
園長	普通免許状保持者(人)	2,625	2,845	3,095	3,564	5,720	6,409
	うち保育士資格保持者(人)	1,748	1,838	1,306	1,430	3,054	3,268
	併有率	66.6%	64.7%	42.2%	40.1%	53.4%	51.0%
教頭 + 教諭	普通免許状保持者(人)	18,623	20,192	65,062	77,474	83,685	97,666
	うち保育士資格保持者(人)	13,524	14,108	49,685	58,241	63,209	72,349
	併有率	72.6%	69.9%	76.4%	75.2%	75.5%	74.1%
園長 + 教頭 + 教諭	普通免許状保持者(人)	21,248	23,037	68,157	81,038	89,405	104,075
	うち保育士資格保持者(人)	15,272	15,946	50,991	59,671	66,263	75,617
	併有率	71.9%	69.2%	74.8%	73.6%	74.1%	73.7%

(4) 本学幼児教育コースにおける保育者としての就職先（表 2・図 2）

本学教育学科の 2009（平成 21）年度から 2011 年度（平成 23）年度の幼児教育関係に就職した学生の状況は以下の通りです。なお、2011（平成 23）年度については、今後変わる可能性もあります。が、ここでは、今年度から認定子ども園への就職者が 3 名いることが、前年度と比較して異なる点です。

表 2. 乳幼児教育・保育関係の就職者（教職支援センター資料を基に作成）

年度	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	合計
2009 年度	6	3	24	1	2	3	3	4	18	0	0	0	64
2010 年度	9	3	23	0	3	5	0	2	25	3	0	0	73
2011 年度	11	2	21	0	2	0	3	2	29	0	1	3	64

- ①保育所公立本採用 ②保育所公立臨時 ③保育園私立本採用 ④保育園私立臨時
 ⑤保育所（園）を除く児童福祉施設 ⑥その他児童福祉施設を除く社会福祉施設等
 ⑦幼稚園公立本採用 ⑧幼稚園公立臨時 ⑨幼稚園私立本採用 ⑩幼稚園私立臨時
 ⑪認定子ども園公立 ⑫認定子ども園私立

¹ 「平成 22 年度幼児教育実態調査」文部科学省初等中等教育局幼児教育課 平成 23 年 5 月

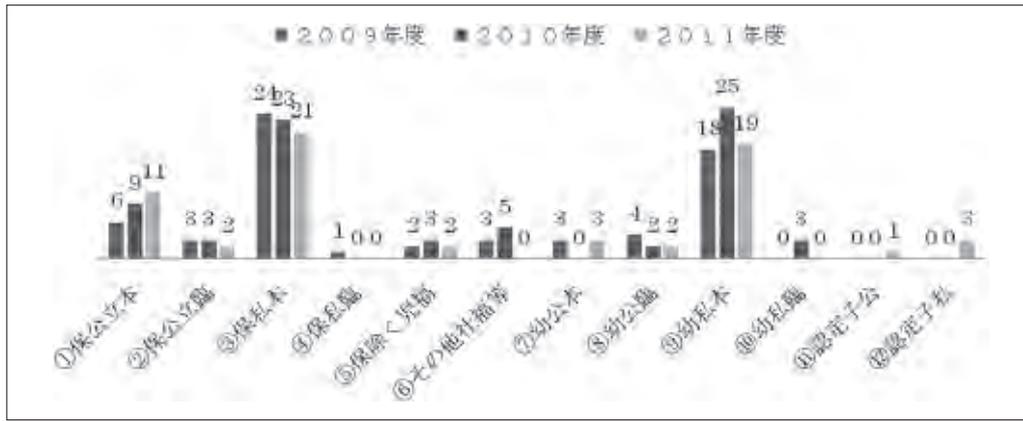


図2. 乳幼児教育・保育関係の就職者（教職支援センター資料を基に作成）

5. 乳幼児教育の保育を巡る専門職と養成

日本の保育制度は幼稚園と保育所（園）の二元化を保ってきましたが、1996年に地方分権推進委員会において、幼稚園、保育所の施設の弾力的な共用化があげられて以来、僅かではありますが幼保一元化に向かって歩んできました。幼保一元化は幼保一体化とほぼ同様の意味を持っていますが、民主党政権に代わって以来、幼保一体化と表記されているようです。

その施策は、それぞれの立場において多くの課題が残され検討が必要とされています。そうした中、一番懸念されていることが子どもの育ちを見通した保育の質の問題です。

本学、教育学科は教員養成を目的として女子大学の特性を生かし、多くの教員を育ててきた道のりがあります。その社会的役割は今後も果てしなく続くであろうことを考えると、本学の教員養成に責任を感じざるを得ません。

これまでの乳幼児教育の施策から考えると、保育は Childcare、保育所は Nursery school であり、教育は Education、幼稚園は Kindergarten でした。しかし、近年では前述したように、幼稚園・保育所（園）問わずに養護と教育の一体化が求められています。

そこで、あえて、保育所（園）・幼稚園と区別するのではなく、幼稚園と保育所（園）は子どもを育てる保育の場として、保育の質を大切にする幼保一体化としての「Early Childhood Care Quality in the Integration」の視点から乳幼児教育に関わる学生の人材育成が求められるような気がしてなりません。

本学教育学科保育士養成課程の定員は 80 名です。幼稚園教諭免許と保育士資格同時取得希望者は平成 21 年度入学生は 124 名、平成 22 年度入学生は 105 名でした。

入学者母数との関係もあり概括しかとらえることはできませんが、乳幼児の教育や保育を目指す学生には、社会のニーズに応えることのできる教養的資質と専門的資質が必要です。

そうした教員養成の資質向上に応えられるように、環境を整え、努力をしていかなければならないのではないかと模索する日々です。

ⁱ 幼保一体化は幼保一元化と同様の意味合いを持つが、民主党政権に変わってから幼保一体化とされた。

ⁱⁱ 2008（平成 20）年 8 月に実施された調査。10 歳未満の児童を持つ家庭から各自治体（政令都市 17、中核都市 15、東京特別区 5、一般市町村 66）から無作為に抽出した世帯

平成 23 年度の教育実習を終えて ～教育実習事後指導から～

教職支援センター
鷲尾悦朗

例年、教育実習を終え、大学に帰ってくると、「迷いが吹っ切れました。やっぱり先生になります。」と決意新たに教職を目指す学生が増えてくる。実習前までは、「教師になりたいが、一般企業での就職活動も…」とか「小学校の先生になりたいが、自信がなくて…」と言っていた学生も、学校現場での児童生徒との人間的なふれあいや教えることの喜びを体験し、本来持っていた教職への憧れが明確に自分の目指すべき道として見えてきたのであろう。大学で教職に関する科目はもちろん専門に関する科目など、教育に関する多くのことを学んできたが、学校現場でしか味わうことができない教職という仕事の奥深さに触れ、「教職に就きたい」と希望に胸を膨らませる。そして、わずか一月足らずの教え子たちとの交流を目を輝かせながら語ってくれる。

本学では、去る 12 月 10 日に「教育実習事後指導」として、教育実習生の体験発表と担当教員による事後指導を実施した。今年度は、この事後指導で実施したアンケート調査にもとづいて教育実習の成果を検証していきたい。そして、次年度の教育実習参加予定者には、先輩たちの体験発表から、来年度、自分はどのような教育実習にしようか、その目的と課題明確にするとともに実習参加への参考としていただきたい。特に、今年度から、来年度の教育実習参加予定者（教育学科 2 回生、教育学科以外の教職課程履修者は、3 回生）が次年度の教育実習事前指導として体験発表を聴講した。その感想も合わせて掲載しておきたい。

また、神戸女子大学の学生を教育実習生として受け入れていただいた全ての学校の先生方には、このまとめをとおして厚くお礼を申し上げる次第です。ご多忙のなか、本当にありがとうございました。

《質問 1：教育実習を経験して、あなたの教育観や教師観は変わりましたか。また、この経験をとおして、どのような成果が得られましたか。》

◎ 「教育は人なり」と言われますが、私は教育実習に行くまでは、その意味がよくわかりませんでした。しかし、教育実習で学校に行ったことでそのことがとても理解できました。授業参観で多くの先生方の授業を見せていただき、教え方や学級経営にその先生の人柄や個性が溢れていることを実感しました。また、子どもたちもどこかその担任の先生に似ているような気さえしました。

教師という仕事に責任の重さを感じると同時にやりがいのある大切な仕事だと改めて考えさせられました。教育実習でそう気づいたからこそ教師として子どもたちの前に立ったときには中途半端なことは絶対したくないと強く思いました。(小学校)

◎ 教育観、教師観は、より深くなった。現場の先生方がどのように生徒と向き合っておられるか、また、どのようなことに気をつけておられるかということについては、それぞれの先生方によって

違っていましたが、生徒にわかりやすい授業をしようとされていたことは同じでした。

この経験をとおして板書計画の工夫や発問など生徒と授業を通じて対話することの大切さと難しさを学び、今までとは異なる新しい授業観を持つことができた。(中学校)

《質問2：教育実習で困ったこと、苦しかったこと、わからなかったことがありましたか。また、このことについてどのように解決したか。》

- ◎ 担任の先生がおられなかったときに、給食の時間がいつもより騒がしく給食のルールさえ守っていませんでした。子どもたちは、まだ私を先生ではなく実習生としてしか見ず、先生がおられる時とおられない時の態度が違い、こんな場合どう接すればよいのか困りました。

解決するために、私はいつもと違う表情や口調と態度で、「今はどうすべき時なのか」「先生がおられる時でもおられない時でも同じように行動しなければならない」などと話し、4年生ならばどうすればよいのかを毅然と指導しました。

彼らは、理解すればすぐに行動に表せる子どもたちだと信じ、嫌われることを恐れず勇気を出して厳しく指導をしました。よかったと思っています。(小学校)

- ◎ 実習2週目から「朝の会」と「終わりの会」を任せられました。3分程度ですが、「先生からのお話」の時間があつたので、最初はその日にあつた出来事くらいしか話せなかったのが、どうすれば有意義な時間になるのか、さまざまな先生に聞いて、「一方的に話すのではなく、生徒に問いかけたらいい」とアドバイスをいただきました。質問形式で生徒とコミュニケーションをとりながら話すようにしました。おかげで、次第に私の話に多くの生徒が興味を示すようになってくれたように思います。(中学校)

《質問3：教育実習の前に身につけておけばよかったと思うことと、準備しておけばよかったと思うことは何ですか。》

- ◎ 実習が始まって、1、2週間は先生方の講話の時間があり、お話の中で質問されることもたくさんありました。「人権教育と道徳教育の違いは?」、「教師に必要な資質や能力は?」、「あなたがこれだけは人に負けないぞと言えることは?」など、ぼんやりとはわかっているものの、どう言葉に表せばよいのか、また、自分自身の考え方も定まっていなくて、答えに戸惑うことがありました。放課後や休憩時間の職員室では、このような教育についての話題が多いので、実習生としても話に参加できるように幅広い知識を身につけておけばよかった。

これは、自分の教育に対する思いが中途半端なまま実習に行ってしまったせいだと思っています。もっと、大学での授業をしっかりと聞いて自分のものにする。自分の考えをしっかりとつ。そして、自信をもって発言することに心がけていきたいです。(小学校)

- ◎ 教材研究です。さらに、指導案については、授業をするところを事前に聞いておいて、一週目から書き始めるべきであったと思いました。

毎日、教材研究・指導案づくりに追われ、職員室に引きこもりぎみになってしまい、生徒とのコミュニケーションがなかなかとれなかったのが心残りです。

もう一つは、生徒の名前をある程度覚えることです。目立つ生徒の名前は、すぐに覚えられるけれど覚えづらい生徒もいました。名前を覚えられない限り、生徒も心を開いてくれないので、事前に名簿をいただいております。覚えておく必要があると思いました。(中学校)

《質問4：教育実習を経験して、よかったと思うこと、また、今後の自己の課題と捉えていることは何ですか。》

◎ 教育実習は、私が今までに経験したことがないほど充実した4週間でした。毎日遅くまで次の日の授業について考え、とても忙しい日々でしたが、子どもたちからの言葉かけや笑顔は、忙しさや大変さを忘れさせてくれるものでした。

この実習を通して自分の可能性に気付くことができ、自分のよさを発見することができよかったです。と思っています。(小学校)

◎ 何よりも大学だけでは学べないこと、学校でしか味わえないことが多くあり、本当に良い経験になったと思っています。授業は計画通りに進みませんでしたが、思っていた以上に生徒との人間関係が深まり、充実した実習となりました。さらに、自分が授業をしたり生徒指導に関らせていただく中で、改めて先生方の凄さを感じ、教師になろうという思いが更に強くなりました。

今後の課題としては、わかりやすい楽しい授業ができるようになること、そして、そのための知識や情報を得ることだと考えています。

《質問5：教育実習の感想・後輩へのアドバイスを書いてください。》

◎ 後輩へのアドバイスとして、私が先生から言われた言葉を贈ります。

「完璧にできなくて当たり前、何でもできてしまう実習生はかわいくないわよ。わからないことがあれば何でも聞いて、いっぱい吸収すること。『目の前にいる子どもたちにとって何がいいのか』を考えられればそれでいいのよ。』『先生って楽しい』とわかればそれでオッケーです。(小学校)

◎ 緊張や不安が大きいと思います。多忙なか実習生として受け入れ、指導していただけることに感謝しながら、多くのことを学び先生方の指導技術を盗み取ってほしいと思います。

最初からうまくいく人はいません。一つでも多くを学び、体験し、3週間という短い期間で少しでも成長できたらと思います。(高等学校)

教育実習事前指導を聴講した2回生・3回生の感想

◎ 教育実習に行かれた先輩方のお話を聞いて自分がやりたい教育実習の理想像など定まっていなかったものが、だんだん形になってきました。…中略…4人の先輩の発表の中で、子どもたちとの関わり方などを話されましたが、自分ならどのように対応するだろうと、自分に置き換えながら聞いていました。…略…

◎ …略…間もなく3回生になっていろいろな実習が始まると思うと不安で胸がいっぱいになります。そんな時に先輩方から「最初は不安だったけど、すぐに吹き飛ばよ」という話を聞き、すごく安心しました。不安だった気持ちが、実習の様子を聞き「早く実習に行きたい」という期待に変わ

りました。…略…

- ◎ …略…今日の話のを伺うことで、教育実習への不安は、『いよいよ自分も教育実習に行くのだ』という自覚に変わりました。…教育実習の流れを詳しく説明してくださったので、少し不安が解消できました。…最後に、私が一番心に刻み込まれたのは、「課題を持って教育実習に向かう。」ということでした。何かが得られるだろうと過ごす4週間と、自ら答えを探っていこうとする4週間は大きく変わってくると思います。今から課題探しをしていきます。…

☆ この教育実習体験発表を2回生の事前指導として聴講することとしたが、2回生の感想をまとめると概ね次の4点に要約できる。これは、教育実習の事前指導としての大きな成果である。

しかし、授業に関しては、指導案作成への自信のなさ、研究授業がうまくできるのかという不安に関する感想も多くあった。

これらの課題に対して、大学での教育実習事前指導や学習過程指導論、教科指導法等の各授業において、今の学校現場に即応した指導の充実が浮き彫りにされた。

[事前指導としての聴講の成果]

- ① 体験発表を聞くことによって、不安解消につながっている。
- ② 教育実習のおおまかな流れがわかってきた。
- ③ 児童生徒との人間関係づくりが大切であること。
- ④ 課題をもって実習に望むことが大切。

☆ データから見る教育実習の概要

○ 教育実習生が担当した学年（人）

	教育（小学校）	日 文	英 米	国 際	史 学	家 政	管 栄
1年	16	6	8	1	4	12	1
2年	29	5	0	1	9	4	4
3年	24	4	3	1	1	1	6
4年	22						0
5年	10						2
6年	7						2
調査人数	108	15	11	3	14	17	15

(科目履修生を含む)

○ 教育実習生が参観した授業と実施した授業の平均（回）

	教育（小学校）	日 文	英 米	国 際	史 学	家 政	管 栄
参観授業時数	23.7	17.0	15.0	15.0	13.9	20.6	9.1
実施授業時数	9.2	13.9	17.5	12.0	15.0	10.6	2.4

※研究授業回数は、小・中の区別なく、1～2時間であった。

※2時間の内訳は、教科の授業と道徳の授業であった。

※高校・栄養教諭の研究授業は、全て1時間であった。

○ 小学校で取り組んだ研究授業の教科（人）

国語	社会	算数	理科	道徳	その他
37	0	63	2	2	2
その他2（体育1、学級活動1）					

小学校における理科教育

文学部 教育学科

助教 村田 恵子

文部科学省は、平成20年3月に学校教育法施行規則の一部改正と小学校学習指導要領の改訂を行った。新小学校学習指導要領は平成23年度から全面的に実施しており、小学校の学習内容は増加・改善され、総授業時数は、学校教育法施行規則の改正前の5367時間から5645時間に増加した。

新学習指導要領を理科に絞って注目してみると、目標には、「自然の事物・現象についての実感を伴った理解」があげられ、これまで以上に「理解の充実」が求められている。さらに、平成20年1月の中央教育審議会の答申の中で、理科の改善の基本方針として、「観察・実験の結果を整理し考察する学習活動」と「科学的な概念を使用して考えたり説明したりする学習活動」の充実が規定されており、第6学年の目標の中には「推論」が新たに規定された。理科の授業時数は350時間から405時間に増加し、それに伴い学習内容も増加している。

本学教育学科では、小学校教員免許取得の必修科目として「理科概説」と「理科教育法」を開講している。いずれも、理科4分野についての観察・実験を伴う授業スタイルで、理科の面白さを実感し、目的やテーマに沿った実験をどんな道具・器具を使用して、どのような手順で行うかを学ぶことを目的にしている。本学教育学科の学生には、理科に苦手意識を持つ人は少なくない。この授業によって「理解の充実」を図り、教員採用試験に対応できる知識と、将来小学校教諭として教育現場に立ったとき、学習指導要領に記される理科の目標を遂行できる実践力を身につけてほしい。また、この授業ではレポート作成や演習問題を課している。受講し始めの頃は、慣れないせいもあって苦心している様子が窺えるが、これは、上記の2つの基本方針にあたると考え、楽しみながら取り組んでほしい。

また、小学校理科の学習内容には、実生活との関連を重視した内容が加えられ、従来課題選択であった内容が必修化した。例えば、「火山の噴火による土地の変化」と「地震による土地の変化」は、従来どちらか一つを選択すればよかったが、今回いずれも必修化した。2011年3月11日に起きた東北地方太平洋沖地震とそれに伴う津波による甚大な被害は誰の記憶にも新しいが、2007年には新潟県中越沖地震、我々の身近なところでは1995年に兵庫県南部地震もあった。これらの地震から、誰もが日本が地震国であることを再認識している。さらに、日本は火山国でもあり、活火山の数は108にも上る。2011年1月26日には九州の新燃岳噴火があり、火山灰の噴出による被害も深刻なものであった。「火山」と「地震」を必修化したことは、これらの自然現象に伴う災害が、私たちの生活に大きな影響を与えることを考えれば当然のことといえる。正しい知識を得ることは、正しい防災対策を講じることにつながる。

地震や火山以外にも、私たちの身の回りに、「なぜ?」「どうして?」と不思議に感じることはたくさんある。私たちは、「なぜ?」と思ったことが判った時の喜びが大きいことは、これまでの経験でも知っている。当然小学校でも、その喜びをできるだけ児童らに味あわせたい。理科の授業時間だけが理科を学ぶ機会ではない。国語の文章、音楽で習う歌の詞の中にも自然を描写したものは多くあるし、校内で

の植物栽培、動物の飼育も理科である。校庭のブランコは「振り子の原理」だし、シーソーは「てこの原理」である。生活のあらゆる場面で、教科を超えて子供たちの疑問を引き出し、指導できるのが、全教科を担当する小学校教諭の醍醐味の一つとも言えよう。教師が日常生活のあらゆる不思議を面白がりながら教える姿勢が、児童らに理科の楽しさを伝えられることになるであろうし、学級経営のアイデアも豊かになると思われる。

2002年、ノーベル化学賞を受賞した田中耕一さんは、受賞後のインタビューで、「科学者としての原点は小学校時代に受けた理科の授業にある」と述べている。皆さんが目指している職業は、子供の将来に関わる大変重要な役割を担うものであり、無限の可能性を秘めた子供たちを育てる仕事である。ぜひ、夢を持って貪欲に学ぶ大学4年間にしてほしい。



小学校から高等学校までを視野に入れた家庭科教育

家政学部 家政学科

教授 田 中 陽 子

普通教育としての家庭科は、小学校第5学年に始まり、高等学校まで男女が共通に学ぶ必修教科です。家庭科で育てる能力と教育内容は、各学校段階でとらえる発達を重視した上で、新たな能力開発の適時性を見逃さないようにするとともに、小・中・高等学校の間で順次性・一貫性が保たれることに配慮して構想されることが必要です。また、小・中・高等学校の家庭科はいずれも時間数が削減されていく傾向にあるなかで、無駄な重複や反復を避け、短い時間の中で確実な成果を積み上げていくことが求められています。これらのことから、中・高等学校の家庭科を射程におさめた小学校家庭科、小学校の家庭科を踏まえた中・高等学校の家庭科であることが必要になるでしょう。

小学校では家族の一員としての視点で身近な家族や家庭生活について学習します。小学校の内容構成の基本を形作る「食事」「衣服」「住まい」の枠組みは、中学校では「食生活」「衣生活」「住生活」へと変わります。これは中学校の内容が生活の営みを対象にし、生活自立を目指した教育になることに相即していると言えます。また、「衣服と社会生活とのかかわり」「目的に応じた着用や個性を生かす着用」など、個人と社会の関係認識を基調にした学習が加わり、学習者は“人間にとってのものとは何か”という生活における基本的な問題を、衣食住にかかわる営みを通して解いていくこととなります。高等学校では人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的な視点でとらえて学習し、家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を確立していきます。そして、社会との関係を前提にした家庭生活の学習を、人生に連動させるとともに総合的な視点でとらえることで、生活にかかわる価値認識を育みます。生活を社会にかかわらせたり、人生を見通すには価値が必要になるからです。また、家庭科で生活を総合的にとらえるのは、生活を現実に対応させて正しくとらえるという側面のほかに、問題の所在と解決の道筋を明らかにするという面があります。したがって、総合的な視点には「生活の見方」の要となるものが需要で、それは時代状況と密接につながったもので、広い意味で生活に対する「思想」です。経済成長を前提にしていた時代の「生活の見方」と、震災・原発事故を経験した現在の「生活の見方」に明確な違いが生まれているのはこのためです。

自分の基点を家族に位置づけることで始まる家庭科は、生活に必要な知識・技術の習得ならびに生活の価値認識を獲得しながら「生活の見方」を確立し、「自分を成り立たせるための生活を自分で創り出す」ための教科であると考えらるなら、生きることの本質に最も近いところに位置する教科だと言えます。